

4 スポーツ二題

一 十九番ホール

ゴルフの醍醐味は十九番ホールにあるといわれる。全コースを歩き終わってクラブハウスに引き揚げるわれわれを、まず待っているのは浴室である。汗ばんだ全身を湯に浸し、心地よく疲れた手足を存分に伸ばす。洗い終えた全身を、清潔な下着で包む。乱れた頭髪を整えて洋服を身につける。次に待っているのは食堂だ。

急いでビールを注文する。それが運ばれてくるのがとても待ち遠しい。そしてグイーツと飲み干すビールの味は、何とも筆舌につくしえないものがある。また何を食べてもおいしい。そこに一陣の涼風が見舞ってくれば、まさに天国だ。そのころにはコースを包む木々には重いたそがれが訪れる。時には白い月が姿を見せることもある。

しかし、十九番ホールのこの悦楽は、それだけを独立に評価することはできない。一番から十八番に至るコースを歩き、各ショットに全力を傾け、多くの成功と失敗、得意と失意を繰り返し、心身ともに相当疲れ果てたあとに、はじめて味わいうる悦楽である。

この悦楽は、独りゴルファーだけの味わいうる悦楽ではなく、あらゆるスポーツ愛好者に恵まれる十九番ホールの楽しみである。この楽しみが、スポーツ愛好者にとっての唯一とまではいえないが、最大の喜びであることに間違いないようだ。しかし「楽不可極」という古語があるとおりに、この楽しみは無限に与えられるものでもなく、したがって無限に追求すべきものでもない。あまり頻度が多いと、スポーツがうむこの醍醐味は減殺されるし、あまり技術的苦吟に没頭しすぎると、この醍醐味は消え失せるものだ。

ゴルフアールにとつても、ウィークデー・ゴルフの是非がいつも問題になる。ウィークデーにはみな、いちおう自分の仕事をもっている。それは自分独りでできる仕事というものは少なく、協業的な状態における仕事が多い。また、だれかがその日、自分の協力を求めているとは保証しがたい状態にある。

そのような状態においては、あえてコースに出かけてみても、満足すべき楽しみをもちたらずものではない。従つて、原則としてウィークデー・ゴルフはお互いに慎みたいものだ。それが十九番ホールの醍醐味を心おきなく満喫できる道ではなからうか。といつて例外のない原則というものはないので、私は何が何でもウィークデー・ゴルフはいけないなどと、野暮な提言をしようとするものではないことを断つておく。

二 スポーツと平和

東京オリンピックの聖火が、全世界の人々の巨大な山脈のような感動の中に静かに消えて、世紀の大作のフィナーレが宣告されたのは、昨年十月二十四日の夜であった。最近、テレビは連日その全記録を再現してくれるし、東京オリンピック組織委員会の手によって編集されたフィルムも集大成を見たようで、近く一般に公開されると聞いている。

このオリンピックには、一つの権威ある憲章のもとで、洋の東西を問わず、国是のいかんにかかわらず、人種の差別もなく、全く公平に参加が許された。また、公正なルールのもとに、世界の若人が、日ごろ鍛えに鍛え上げた力量を存分に競いあった。そして、このスポーツマンシップを媒体として、現に全世界が一つであるということを実感をもつて示したのである。これはまことに人類の偉大な嘗みであり、崇高な成果でもあった。

私はこの感動から、いまなお自由でありえない。世界の政治的現実を、それぞれの国々が、越え難い多くの障害にさえぎられ、溶かし難い不信の海に隔てられているだけに、オリンピックからくる感動は、いつそその鮮度をもってわれわれに迫るものがある。スポーツの世界においては、ルール・イズ・ルールであるとして、ルールの神聖とそれに対する信従が、スポーツマンシップの神髄として確立されている。しかるに政治の世界におけるスポーツマンシップというものは、

今なお星雲状態に低迷を続けている。両者はあまりにも対照的である。特にマルクス・レーニン主義の亜流という神話がわれわれの歴史に力を得てきたからの政治は、マキアベリも舌を巻くほどの巧妙さをもって、政治を詐術の餌にしまいつつあるようである。

しかし、われわれ人類は、スポーツの世界において、これだけの崇高な成果を収めて、スポーツに関する限り、世界を一つにするという立派な道標を打ち立てることに成功したのである。そして、この精神は年輪を経るにしたがって、ますますその権威と精度を増しつつあるのである。また、この精神はわれわれの営む家庭から社会へ、社会から国家へ、国家から世界への道程において、人類が組織する集団の多くの網の目をぬう精神を純化し、これを高めるのにどれだけ大きい役割りを果たしてあるかわからない。これは、まさに人類の至宝である。

平和といい、繁栄といつても、座して恵まれる贈り物ではない。そのためには、お互いの個人社会、国家が、権威ある犯し難い共通のルールを守り抜くことが第一の条件になってくるものである。そのルールは、追えども手のとどかない青い鳥ではなく、今日スポーツの世界において、だれもがあたりまえのこととして遵奉しているスポーツマンシップという形において、人類はすでにそれを保有していることを忘れてはなるまい。